

Title	A・W・N・ピュージンとオックスフォード運動
Author(s)	近藤, 存志
Citation	聖学院大学論叢,18(3) : 65-83
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=73
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

A・W・N・ピュージンとオックスフォード運動

近藤 存志

Augustus Welby Northmore Pugin and the Oxford Movement

Ariyuki KONDO

The Gothic Revivalism of Augustus Welby Northmore Pugin (1812-52), a giant of nineteenth-century English Gothic Revivalism and an Anglican converted to Catholicism, was a profound architectural development propelled by Pugin's passion for reviving the Catholic church and pre-Reformation ecclesiastical art. This development naturally lent itself to empathy for and support of the Oxford movement, which aimed to strengthen the Catholic tradition within the nineteenth-century Church of England. This paper examines the relation of Pugin to the Oxford movement, both in agreement and in conflict. Particular focus is placed upon the writings of Pugin and John Henry Newman, which vividly reveal their views of each other: e.g., Pugin's letter to John Rouse Bloxam and John Henry Newman's commentaries on Pugin's views of Gothic architecture, written both before and after Newman's conversion to Catholicism in 1845.

Key words: A・W・N・ピュージン, オックスフォード運動, ジョン・ヘンリー・ニューマン, ゴシック・リヴァイヴァル

1. はじめに

建築家オーガス・ウェルビー・ノースモア・ピュージン (Augustus Welby Northmore Pugin, 1812-52) によるゴシック・リヴァイヴァルのデザイン運動は、イングランド国教会が誕生する以前のキリスト教信仰とその芸術を19世紀に復興しようとする意志と深く結び付いて展開した。その意味では、イングランド国教会のカトリック的伝統を強調した19世紀イングランド国教会内の信仰復興運動 オックスフォード運動 と共鳴する点が少なくなかった。ピュージンのゴシック・リヴァイヴァル運動とオックスフォード運動の関係については、双方の刊行した論説書の内容や書簡

の中の記述等を中心にこれまでしばしば指摘されてきた。しかし、その関係の詳細についてはまだ十分に考察されてきたとは言えない。またピュージンとオックスフォード運動の双方の立場からの教会建築の在り方に関する見解や、19世紀イングランドにおける信仰復興運動の方向性をめぐる両者の見解についても十分に検討されてはこなかった。

そこで本稿では、オックスフォード運動の展開に関するピュージン自身の具体的な見解や、ジョン・ヘンリー・ニューマン（John Henry Newman, 1801-90）がピュージンの印象についてオックスフォード運動の立場から、さらにはカトリック改宗後にオラトリオ会の立場から書き残した記述に注目してみたい。それによって、ゴシック・リヴァイヴァルによる厳粛なキリスト教会建築の実現を目指したピュージンと、ニューマンをはじめとするオックスフォード運動が互いの立場と見解に見出した一致と不一致を検討することにする。

2 . A. W. N. ピュージンのカトリック改宗

ピュージンは、1812年に、一連のゴシック建築に関する書物⁽¹⁾の編者や図版の制作者として知られる父オーギュスト・シャルル・ピュージン（Augustus Charles Pugin, 1769-1832）⁽²⁾と、高名な法廷弁護士娘で、リンカンシャー、デントン・ホールの準男爵ウィリアム・ウェルビー卿の親戚筋にあたる母キャサリン・ウェルビー（Catherine Welby）との間に生まれた。

ピュージンは初等教育をロンドンのクライスト・ホスピタル・スクール（Christ's Hospital School）という学校で受けたと言われている⁽³⁾。ピュージンの伝記を著わしたフェレイによれば、ピュージンの「この学校への進学は、おそらく自宅にもっとも近接したパブリック・スクールであり、過度の疲労を伴うことなく通学することができ、その結果両親の保護の下で育てられることができる」との理由から決定されたといわれている⁽⁴⁾。フェレイは、この学校でのピュージンの学業成績についてもいくつかのエピソードを紹介しており、それらは後のピュージンの独善的なまでに情熱に満ちたゴシック・リヴァイヴァリストとしての活躍を予見させるものである。

ある教師が彼（ピュージン）について語ったところによれば、ラテン語やギリシア語、数学、その他あらゆる教科において、他の生徒たちが何週間もかけて学ぶ内容を彼は24時間で学ぶことができたという。そして彼は、ただの子供でありながら、自分で試みた事柄のすべてを素早く習得し、雄弁であり、弁舌さわやかで、熱烈にもっとも独善的な態度で自分の見解を主張した。こうしたことから、後年、彼が時々不法な態度で人の感情を害することになったことは驚くべきことではない。実際のところ、そうした不法な振る舞いは彼が才能のない人間であったなら許容されるものではなかったであろう。⁽⁵⁾

ピュージンは、クライスト・ホスピタル・スクールで一定の教育を修めた後、大学へ進学することなく、そのまま父親の事務所に入所した。彼は父のもとで建築に関わる多彩な分野について研鑽を積むとともに、『ゴシック建築の実例集』(*Examples of Gothic Architecture*, 1828-36) の図版を手掛けるなどしてゴシックに関する教養を身につけた。しかし彼がゴシックが生成されたその起源や目的、機能を含むより深遠なゴシックの伝統に強い関心を示すようになったのは、彼がソールズベリーに移り住んだ1833年以降のことであった。それまでは模倣することに主眼を置いてゴシック建築の研究に取り組んできたピュージンにとって、当初は理解不能とさえ思われたゴシックの起源、目的、機能も、礼拝式に関する教養を修得することで「全く新たな分野」として彼の関心の対象となっていた⁽⁶⁾。やがてピュージンの信仰にも変化が現われ、1835年の聖霊降臨日の前夜、彼はカトリックに改宗するに至った。

ピュージンの改宗をめぐるのは、純粹に信仰に基づくものではなく、ゴシック建築への傾倒、あるいはカトリック芸術の伝統に対する情熱などに起因する「不信仰な行為」であるとの批判が周辺から起きた。ピュージンのカトリック改宗は、オックスフォード運動の最盛期以前のことで、当時のイングランドにおいてはカトリック教徒に向けられた社会的偏見はまだ根強く、英国議会の庶民院におけるカトリック教徒の被選挙権や大半の公務員職への任職も1829年に認められたばかりであった。当時のイングランドのカトリック教会は、中世の芸術やゴシックの伝統を興隆させるだけの勢いも財政的基盤も持ち合わせてはいなかった⁽⁷⁾。こうした状況において、19世紀前半のイングランド・カトリック教会の礼拝空間は、ピュージンが理想としたものとはまったく異なる貧しいものであった。ピュージン自身、その有様について「カトリック教会の真理に懐疑の念をいだくことは一切なかったが、多くのウェスレー派のミーティング・ハウスよりも劣る空間で礼拝することを自分に納得させることに激しく苦闘⁽⁸⁾」しなければならなかった。

ところでゴシック教会建築への興味は、ピュージンがカトリック教会の教義に関心をもつ重要な契機となったが、改宗の決意そのものは彼の建築的趣味に動機づけられたものでは決してなかった。ピュージンは確固たるカトリック信仰に基づいて、カトリック教会が唯一の正しい教会であると考え、それゆえにカトリック教会においてのみ、「教会建築の壮大さと崇高さが復興され得る⁽⁹⁾」と信じたのである。カトリック信仰を唯一理想の教会建築の在り方と結びつけるこうしたピュージンの考え方は、彼の機能主義理論の根幹を成している。ピュージンは「建物の様式は、それを見る人がその建造物の目的を一目でわかるように、その用途と対応すべきである」と説き、建築の美しさを測る基準を、デザインと「その建物が意図した目的」との適合性に見出していた⁽¹⁰⁾。ここでピュージンの言う建物の「目的」、「用途」とは、建物の「機能」を意味するが、この場合の「機能」とは建築の实际的・物質的な用途や機能に限定されるものではなかった。教会建築について言えば、その形態が明らかにすべき「機能」「目的」、「用途」とは、正しいキリスト教信仰の在り方を象徴し、証しすることに他ならなかった。

そして19世紀前半のイングランドにゴシック・リヴァイヴァルを押し進めるうえで、ピュージンの関心は必然的に、イングランドに優れた正しいゴシック様式が確立された時代の、イングランドのキリスト教信仰の在り方に向けられていった。このことは、ピュージンが理想的ゴシック様式を、15世紀より以前のキリスト教信仰が生み出した装飾式ゴシックに見出すに至ったことにも表れている。ピュージンは1840年12月に、「プロテスタント信仰は15世紀における異教精神の復興の結果」であり、「プロテスタント信仰が興隆したのは、イングランドにおけるカトリック信仰が(15世紀以来)衰退期にあったからに違いない」⁽¹¹⁾との考えを示した。そしてピュージンがこうした歴史観を確立したことは、彼が1841年以降、装飾式ゴシックを理想視することになったことと一致している。ピュージンは当初、ダービーの聖母教会(St Mary's, Derby)などにおいて垂直式ゴシックによる教会建築を手掛けていた。それが1841年以降は一転して垂直式ゴシックを拒絶し、15世紀より以前のキリスト教信仰の在り方から生成されたゴシック、すなわち14世紀の装飾式ゴシックに正しい教会建築の典型を見出すようになったのである。確かに厳密には垂直式ゴシックは14世紀前半に出現したゴシック様式であり、その意味では15世紀より以前のキリスト教信仰が生んだ様式ともいえる。しかし、この様式がその後3世紀にわたって様式として洗練された経緯を考えれば、13世紀末に出現し14世紀中に発展した装飾式ゴシックの方が真の意味で14世紀のキリスト教信仰が生んだゴシック様式であったといえる。19世紀前半のイングランドにゴシックという形態をリヴァイヴァルしようとしたピュージンの試みは、確かにこの様式の形態を生み出した時代のカトリック信仰を復興しようとしていた19世紀当時の諸傾向と深く結びついていた。このことは、ピュージンが建築家としての自らの生涯を「カトリック芸術とカトリック信仰の尊厳の復興」⁽¹²⁾という目標のもとに集約させていたことから明らかである。

3. ピュージン, プロクサム, モズリ, ニューマン

1833年7月14日にオックスフォード大学詩学教授ジョン・キーブル(John Keble, 1792-1866)は、《国家的背教》(“National Apostasy”)と題した説教を行った。このなかでキーブルは、時局の政治的出来事、すなわち議会在アイルランドの10教区を非国教化することで教区の数を大幅に減少させる決定をしたことを批判した。19世紀前半のイングランド国教会は、教会の神的権威とその本質的な不可変性に対する世俗権力や世俗社会からの介入という問題に直面していた。そして議会という世俗制度がアイルランドにおける教区の非国教化を決定したことは、当時のイングランド国教会が抱える、世俗権力、世俗社会による神的権威への介入という好まざる状況をまさに象徴する一大事件だったのである。キーブルのこの説教は、カトリック教会の勢力拡充に対する当時のイングランド国教会内の危機意識と相まって、イングランド国教会の信仰復興と教会改革を目指す信仰復興運動 オックスフォード運動 の重要な契機になった。この運動はオックスフォード大学の一群

のイングランド国教会聖職者たちによって推進されたイングランド国教会内の信仰復興と教会改革の運動であったが、カトリック教会の特定の教義と典礼の復興を主張し、その終焉にはジョン・ヘンリー・ニューマンを含む傑出したカトリック改宗者を生み出すなどしてイングランド国教会の範囲を超えて、19世紀前半のイングランドにおける諸教会・諸教派、および社会全般に大きな影響を与えることになった。

オックスフォード運動は、イングランド国教会をカトリック教会と非国教会的プロテスタント諸教派との間のヴィア・メディア、すなわち「プロテスタントの個人主義とローマ・カトリックの法王至上主義」⁽¹³⁾を等しく排した中道的存在として位置付けた。この運動はまた使徒伝承に基づく主教制や sacrament を重視する立場を明確にし、伝統的な規律・慣例を重視、強調したことから、教会堂内の祭壇の在り方や、十字架像や典礼具等への関心を興隆し、教会関連のデザイン分野に多大な影響を与えることになった。とりわけカトリック改宗者であったピュージンは、イングランドのカトリック教会を「当時のヨーロッパ大陸のローマ・カトリック教会の支脈」とは捉えずに、中世イングランドのキリスト教会の再現とみなしていたことから⁽¹⁴⁾、「プロテスタントの個人主義とローマ・カトリックの法王至上主義」を等しく排したオックスフォード運動の動向に注目するようになった。そしてこの運動の主義主張に、彼自身が主導した建築・芸術の領域におけるカトリック・リヴァイヴアルの運動との接点を見出していった。

ピュージンは、オックスフォード運動のメンバーの一人でゴシック建築に関する豊かな教養を持ち合わせていたジョン・ラウズ・ブロクサム (John Rouse Bloxam, 1807-91) と親しかった。ブロクサムは1836年から1862年までオックスフォード大学モードリン・コレッジのフェローであり、ニューマンの「忠実な友人」⁽¹⁵⁾であった。また彼は当初からイングランド国教会とローマ・カトリック教会の再統合を模索していた点でもピュージンと見解を同一にしていた。ピュージンは、1840年12月にブロクサムに宛てて書簡を送り、その中で「今日、すべての真のイングランドのカトリック教徒が、どれほどオックスフォードに注目しているか、貴方には見当もつかないでしょう」⁽¹⁶⁾と述べ、ブロクサムを含むオックスフォードの一群の人々の活動に対して賛辞を送った。そして次のように続けた。

私はつい最近私のようなカトリック改宗者のひとりから手紙を受け取りました。その一節を書き写します。 「私たちを助けるべく高潔な一群の人々がオックスフォードにおいて興隆してきたという神の摂理を目にして、私は今日の非カトリック的な行いの数々について、ほとんど心配していません。イングランドの改宗が、現在のイングランド・カトリック教会から起こることはないということは確実です。イングランドの改宗というものは、その人の精神においてカトリック信仰がもっとも無力な原理で、民主的精神と自由意志の概念がもっとも強力な原理となっているような人々から

ではなく、私たち自身のようにカトリック信仰を古いカトリックの著述家と神父たちの一次資料から吸収した人々の集中したエネルギーからもたらされるはずです。」このようにあなたたちの奮闘がしかるべき形で正しく評価されていることを知ることは、あなたの励みとなるに違いありません。⁽¹⁷⁾

この書簡の中で、ブロクサムを含むオックスフォードの「高潔な一群の人々」の奮闘とは、オックスフォード運動の取り組みそのものを指している。特定のカトリック教会の教義と礼拝式を復活させることでイングランド国教会を再生しようとするオックスフォード運動の姿勢を、ピュージンは自分が取り組んでいた教会建築の領域におけるカトリック・リヴァイヴアルの試みと重ね合わせることができた。事実、19世紀において多分に軽視されていた教会建築の伝統、規律、慣例を復興させることが重要であるというピュージンの指摘は、当時オックスフォード運動の立場からも主張されていたのである。

1840年10月、オックスフォード運動のメンバーの一人であり、オックスフォード大学オリオル・コレッジのフェローであったトマス・モズリ(Thomas Mozley, 1806-93)は、1841年に自らがその職責を引き継ぐまでニューマンが編集者を務めていた季刊誌『ブリティッシュ・クリティーク』誌(*The British Critic, and Quarterly Theological Review*, Vol. XXVIII.)に伝統や慣例に忠実な教会建築観を強調した書評を書いた。ピュージンは、そうしたモズリの教会建築観を、オックスフォード運動の教会建築理解の表明、あるいはトラクタリアンたちの教会建築観の表明として読んだ。そして1841年5月に『ダブリン・レビュー』(*Dublin Review*, No. XX)に教会建築に関する論文を寄稿した際、「カトリックの伝統に対する崇敬を高揚するために大いに貢献してきた人々のなかに、オックスフォードの学識あるイングランド国教徒たちがいる」⁽¹⁸⁾と述べ、オックスフォード運動の働きを率直に称えたのだった。

その一方で、モズリの書いた文は、ピュージンとモズリとの間に存在する「絶望的な見解の相違」をも浮き彫りにした。モズリはピュージンの初期の代表作、垂直式ゴシックによるダービーの聖母教会について、「本当に14世紀に建てられた教会堂の一例であると見間違えてしまうかもしれない」と表現すること以上に、この教会建築に対する私たちの賞賛の念を言い表すことができない⁽¹⁹⁾と述べ、他方でその「配置」と「周囲の建物との立地上の関係」が、教会建築の原則・慣習から逸脱していることを指摘した。たとえば、「配置」については、この教会堂が南北方向に建設されており、教会堂内で会衆が聖餐台に向かって立つとき、彼らは自動的に「光に輝き、温かな東の方向に向かってではなく、北極の凍てつく地方に向かって立つことになる」⁽²⁰⁾ことを問題とした。モズリは「ほんの僅かしか方角が振れることなく西から東の方向に教会堂を建てるのが、イングランドの普遍的な伝統であり、このことはキリスト教圏の至る所で歴史上長い間守られてきたと信じている」⁽²¹⁾と述べ、「それは教義上の掟のひとつである」⁽²²⁾と主張した。

モズリは、こうした教会建築の原則・慣習からの建築的逸脱をあえて強調することで、伝統的な礼拝式の規律を忠実に再興することで自ら再生しようとしているイングランド国教会が、カトリック教会と一体となることは「全く望めない」⁽²³⁾と結論づけた。モズリのこの指摘は、ピュージンにとってはきわめて不当なものと思われた。なぜならピュージンは、オックスフォード運動の活動を通じてイングランド国教会内でカトリックの伝統の再興が進み、やがてイングランド国教会とカトリック教会が再統合されることを望んでいたからである。彼は1841年1月にプロクサムに宛てて記した書簡の中で以下のように指摘し、モズリに対して反論する立場を明らかにしている。

永久に（イングランド国教会とカトリック教会の）統合は望めないという考え方と関連づけられたあの教会（ダービーの聖母教会）の配置に関する記述は、きわめて誤っており、同時に（モズリと）私の間に断固とした絶望的なまでの見解の不一致があることを示しました。（ローマ・カトリック教会は9世紀イングランドのキリスト教会とも19世紀イングランドのキリスト教会とも統合されることはないだろう、という）あの一文で、彼（モズリ）はいったい何を言いたいのでしょうか。間違いなく両教会のもっとも密接な統合が9世紀には存在していました。私は、イタリア風の自新しい物に熱中しているような人間がローマ主義者という表現で形容されることは理解できません。しかし、この表現が中世主義の教会人に適用されるとすれば、それは馬鹿げているというよりも大変な誤りを犯しているのです。……本物のカトリック芸術を復興することの困難さは、ほとんど克服しがたいものです。私は自分が行っていること、そして確信していることのゆえに、徹底的な苦難に耐えなければなりません。しかも私の見解と振る舞いは、非常に許し難いことに、不正確に伝えられています。そしてただ単に私が永続的な効力をもつキリスト教会の掟に反して導入された現代的な浪費行為の全てに反対し、それらを否定しているがために、私は今日の多くのカトリック教徒によって半ば異端者としてみなされているのです。⁽²⁴⁾

このように、モズリの論説のなかでオックスフォード運動の立場からカトリック教会とイングランド国教会との一体化は不可能であるという見解が示されたことは、ピュージンを傷つけたに違いなかった。『プリティッシュ・クリティーク』におけるモズリのピュージン評については、ニューマンも行過ぎがあったと感じていた。というのもニューマンは、カトリック教会のなかに極めて教会的な見地に立った小さいけれども特筆すべき集団があることを認めており、なかでもニューマンはこの頃ピュージンのことをとりわけ高く評価していたからである。ニューマンはモズリに宛てた書簡の中で、「『プリティッシュ・クリティーク』誌の編集者の職務に関わるひとつの問題」について、「あなたが私に賛成するかどうかかわからないけれども、私見を述べさせてほしいのです」⁽²⁵⁾と前

置きしつつ、次のように書いている。

ローマ・カトリック教徒の中には、カトリック教会そのものよりもキリスト教会的な路線をとり、実際のところイングランドおよびアイルランドの同宗信徒たちとの関係を絶ってしまった、小さいけれども活気ある集団が存在します。ピュージンは特にそうした集団の中の代表的存在であり、(彼がクランマー記念碑について無礼な内容の書簡を書いたにもかかわらず)とても良い人物であると私は考えています。彼が並みのローマ主義者たちを批判しているのを耳にすることで私たちは精神を高揚させられるのです。アレブローズ・フィリップス氏についても同様のことが言えます。彼は『タブレット』誌 (*Tablet*) にイングランドのキリスト教会、とりわけ私たちのことを擁護する内容の文章を書いています。そして、あたかも彼が裏切り者であるかのように、彼は自らが属している教会から非難されています。その一方で、ローマのペインズ司教は、「依然として個人的判断などに捉われている改宗者たち」に対しての批判をロジャーズとホープに語っています。今やこれらの人々(ローマ主義者たちを批判しているピュージンやフィリップスなどの人々)はあらゆる面において、支援されるべきであると私は考えています。すなわち、まず第一に真理のゆえに、第二に彼ら自身のために、そして第三に、ローマ・カトリック教会内に分裂を生み出すことは政治的な行為であることから、政策的な観点から、彼らは支援されるべきなのです。そして私は今日、事態はこうした傾向を示していると考えています。私がこれらすべてのことを述べたのは、あなたもおわかりになるように、こうした事柄が『プリティッシュ・クリティーク』誌におけるあなたのローマ主義の取り扱い方に関係があるからです。ピュージンは大変傷ついており、あなたがあなたの論説の中で彼について述べた文章表現の調子を考えればそれは当然のことだと思えます。さらに、私は昨年11月の新刊紹介でのあなたの解釈をあなたが私に送った原稿のままに刊行することを認めたのですが、実のことを言えば、あなたの文章がかなり不躰な論調で悪意と無愛想さに満ちていると考えていたのです。⁽²⁶⁾

4. 『トラクト』90号に対するピュージンの反応

ニューマンがモズリに宛てて上述の手紙を書いた約1週間前、1841年2月27日に『トラクト』の90号が発行され、その中でイングランド国教会の「39箇条」はカトリック的に解釈し得るものであり、カトリック教会の教義と何ら衝突するものではない、というニューマンの見解が公にされた。イングランド国教会のカトリック的側面のみを強調するオックスフォード運動への疑念はそれまで

も存在していたが、この『トラクト』90号が発表されるに至ってオックスフォード運動への反発は一層厳しさを増すことになった。ニューマンの解釈を支持した人は少なく、『トラクト』の発行停止に向けた動きが直ちに起こった。

オックスフォードにおけるそうした反応とは対照的に、ニューマンによって引き起こされたこの「衝撃」に対するピュージンの反応はきわめて好意的なものであった。イングランド国教会の核心部分をカトリック的に解釈したこの『トラクト』の内容は、ピュージンの目にはイングランドのカトリック化——イングランド国教会とカトリック教会の再統合——が現実味を帯びてきた好ましい兆候として映った。ニューマンの主張は、オックスフォード運動がイングランド国教会におけるカトリック的特色を強調する最も象徴的な意味を持っていたからである。ピュージンは、「ごく最近発行されたオックスフォードの『トラクト』によってプロテスタント教徒の間で途方もないセンセーションが起きている」様子について、「オックスフォードの一群の人々は、我々がイングランドをカトリック化すべく一年間かけて達成し得る事柄よりも多くの成果を一週間で成し遂げる⁽²⁷⁾」と喜んだ。

一方、ニューマン自身は、イングランド国教会とカトリック教会の再統合はなお時期尚早と考えていた。39箇条に関する『トラクト』が公にされる直前にもニューマンは、当時のイングランド国教会およびカトリック教会の状況から判断して、「直接的に統合するために敬虔なローマ・カトリック教徒と我々に出来ることは何も無いように思われる。我々に課せられた責務は、むしろ互いに心のなかでひとつであろうと試みることにあり、双方とも別々にそれぞれの教会を向上させるために出来ることを成し続けていくことであろう⁽²⁸⁾」と述べている。ニューマンは、まだ二つの教会が統合に向けて努力すべき時期にあるとは考えていなかったのである⁽²⁹⁾。

ニューマンによれば、彼自身が『トラクト』90号に示した見解は、若いイングランド国教徒たちが「39箇条につまずいてカトリック教会へ改宗してしまうことを回避する意図⁽³⁰⁾」によるものであったが、ピュージンはその内容をそのようには読まなかった。ピュージンの立場からは、オックスフォード運動によるイングランド国教会のヴィア・メディアとしての位置付けは、イングランド国教会におけるカトリックの伝統の再興を意味していた。そしてニューマンの39箇条の解釈は、ピュージンの目にはまさにイングランド国教会のカトリック化、さらにはイングランドのカトリック化の現われとして映った。このことは、『トラクト』90号が発行されてから約一ヵ月半後の1841年4月13日に、ピュージンがニューマンについて次のように書き記していることから明らかである。

ニューマンが正しい方向を模索していることに私は満足しています。彼は（イングランド国教会とカトリック教会との）再統合を視野におき、可能な限り迅速にそれに向かって突き進んでいます。こうした立派な人々を急き立ててはなりません。彼らは事を急ぎたくないのです。彼らは大変困難な事柄を成し遂げるために必要な慎重さを一貫して持ち続けながら、あらゆる努力をしているのです。⁽³¹⁾

ピュージンは、『トラクト』90号に中世イングランドのキリスト教信仰の伝統復興の兆しを見出す一方で、その衝撃的な内容のゆえに「遠くない将来に、(ニューマンの見解に対する)何らかの反論があらわれる」可能性を予測していた。『トラクト』90号が公になってから一ヶ月後には、ピュージンは「今日の事の進展がすべて良い方向に働くこと」を願わずにはいられなかった。というのも、この頃までにはすでにピュージンの目にもイングランド国教会内にニューマンに対する「怒りに満ちた激発が猛威を振るって」いる状況は明らかになっており、「プロテスタントたちは自暴自棄なまでに態度を硬化させて」⁽³²⁾いたからである。事実、当初は「オックスフォード運動の良き理解者」と考えられていたオックスフォード教区主教リチャード・バゴット (Richard Bagot, 1782-1854)⁽³³⁾が、ニューマンに『トラクト』への執筆禁止を命じるに至った。その背景には、当時すでにイングランド国教会内に生まれていた福音主義とオックスフォード運動との対立の構図を『トラクト』がさらに悪化させることを回避したいという意図があった。

こうしたオックスフォード運動を取り巻く状況から、ニューマンたちが模索したイングランド国教会の在り方　ヴィア・メディア　を達成することの難しさをピュージンは実感するに至ったと思われる。『トラクト』90号が世に出てから一年後には、ピュージンは「ヴィア・メディアは、その危険で不確かな道を歩み進める人々にとって急速に狭まってきており、まもなく完全に実行不可能なものとなるであろう」⁽³⁴⁾と考えるようになっていた。ニューマンたちが1845年にカトリックに改宗することになるオックスフォード運動の行く末が、この頃すでにピュージンの目には明らかになっていたのかもしれない。

5 . J. H. ニューマンからみたピュージンの「偏狭」なゴシック主義

ピュージンのゴシック・リヴァイヴァルの試みは、確かに19世紀前半のイングランドにおけるイングランド国教徒を含めた広範なカトリック・リヴァイヴァルの動向と協調しながら展開した。しかしだからといって、ゴシックを絶対視するとともに、妥協することを徹底して拒否する頑なピュージンの姿勢が、カトリックの伝統を再興しようと尽力する同時代のすべての人々からそのまま支持されたわけではなかった。『対比』(*Contrasts*, 1836) や 『尖頭式の、すなわち教会建築の正しい諸原理』(*The True Principles of Pointed or Christian Architecture*, 1841), 『キリスト教会建築復興の弁明』(*An Apology for the Revival of Christian Architecture*, 1843) 等の著作において示されたピュージンの情熱的なゴシック崇敬に対して、違和感を持つ人々も少なくなかった。そしてこうした人々のなかには、前述のとおり以前にはピュージンに対して同情的な態度を表明していたニューマンも含まれていた。

ニューマンは1845年にイングランド国教会からカトリック教会に改宗し、オラトリオ会に入会した⁽³⁵⁾。16世紀に創設されたオラトリオ会は、イングランドにおけるカトリシズムの再興にイタリア

的傾向・趣味を強調する一群を形成したこともあって⁽³⁶⁾、中世イングランドのキリスト教会の再興を強力に主張しながら、当時のローマ・カトリック教会の教会建築はあまりに「異教的」な装飾、ディテールに溢れておりキリスト教建築として相応しくないと主張していたピュージンは基本的に相容れない存在となっていた。オラトリオ会のニューマンにしてみれば、中世イングランドのキリスト教信仰を絶対視するとともに、サン・ピエトロ大聖堂をはじめイタリア建築のすべてを異教的で醜悪な存在とみなすピュージンのゴシック・リヴァイヴァルの姿勢は、19世紀イングランドからの現実逃避としか見えなかった。嘗てはピュージンに好意的な印象を持っていたニューマンであったが⁽³⁷⁾、ゴシックを唯一の様式とみなす彼の頑な態度はあまりに「偏屈」で「偏狭」なものに感じられた。ニューマンは、「ゴシック建築の規範が彼(ピュージン)にとっては信仰の尺度であり、それに疑問をいだく者は誰しも異教徒とみなされてしまう」⁽³⁸⁾ ことに強い抵抗を感じていた。

1850年4月7日にニューマンの手によって書かれた一通の手紙は、ニューマンの教会建築を理解するうえで、さらにはニューマンがこの頃、ピュージンの人柄や考え方に対して懐いていた批判的な印象を理解するうえで貴重な内容を多く含んでいる。そしてそれは同時に、同じカトリック教徒でありながら、二人の間に決定的な見解の相違があったことを如実に示している。

ピュージン氏がいったいどんなことを書いているのか私は知りませんし、また興味もありません。なぜなら、彼は常識を具えた人のように話をしませんし、書いていないからです。彼は人が実際には言ったこともなければ、考えたこともないことを(まるであたかも本当のこのように)こきおろすのです。私自身はと言えば、ここには『ランブラー』誌(*Rambler*)に討論や批評、投書を一行たりとも書いた人は誰もおりませんので、未だ嘗て極端に偏った見解や偏狭な考えをもった人々を決して容認してこなかったひとりの純粋な傍観者の立場としてこの文章を書いているのです。私は、ピュージン氏のことを頑迷な人物、あるいは自分自身の偏狭な物事の見方以外の見解について何も理解しようとしたり、認めようとするのしない人物であり、自分の考え方と異なる見解を持つ全ての人々について故意に誤ったことを伝えるような、そんな人物であるとみなしています。……

あなたが書かれた内容から察するに、ピュージン氏はまるで『ランブラー』誌が「オペラ音楽」、「めかしこんだ聖職者」、「機能の軽視」、そして「詩趣に富んだ、あるいは荘厳なものすべて」を唱道しているかのような印象をあなたに与えたのでしょうか。

ドームは美しく、「詩趣に富んだ、あるいは荘厳」な存在ではありませんか。列柱は美しいではありませんか。私の美的趣味に照らして、それら(ドームと列柱)はゴシック建築のあらゆる要素と等しく、いやむしろより一層美しいものですが、ここではそれらが美しい存在であるということを確認しておくだけで十分です。しかしなが

ら、ゴシックはそれらを認めていません。ゴシックに罪があるわけではありません。

しかし、それらは、ゴシックが優れた建築を形成する要素の一部しか示していないこと、あるいは美しい建築を生み出す要素でゴシックには含まれていない要素がほかにも存在することを示しているのです。したがって、ゴシック建築が美しい建築を形成する要素の全てを示していると主張する者は、偏狭な見解を持つ人であり、頑迷な人なのです。その人は美しい存在であるものを排除しているからです。

ピュージンは美しいものを排除してしまうばかりか、ドームと列柱を美しいと認め、姿勢を異端信仰と呼ぶことさえするのです。

私が彼の中に見出した新しい、そしてより一層耐え難い誤りは、彼がゴシック芸術に対する好みを正教信奉とみなし、古典主義芸術やイタリア芸術を異端信仰と結びつけているという点です。彼は、ローマの光景は新任の聖職者に対する試練であるとさえ語ったのです。何という極めて反対すべき考え方ではありませんか。このような考え方は冗談のネタにもすることのできない深刻なものです。正教信奉を信仰心と道徳観における真理にではなく、何か別のものの中に見出したり、信仰心と道徳観以外に私たちにとって必要不可欠な唯一の真理が存在すると考えるような人は、自ら異端者となってしまうのです。そして私はこうした理論家たちを何であれ信頼することはできません。私はピュージン自身に対して反論しているではありません。私は、ピュージンが代表し、推奨しているものの考え方に反対しているのです。そうしたものの考え方は異端信仰へと至るからです。

言い難いことですが、そもそもそうしたものの考え方は大いなる矛盾に満ちているのです。美的感覚において他を凌ぐと広く一般に認められている国民が存在するとすれば、それはギリシア人です。彼等の建築は反宗教的であるとは言おうと思えば言えるでしょう。ギリシア建築はキリスト教的な考え方を象徴していない、ギリシア建築の細部の実例は道徳に反する造形である、と主張することはできます。

しかし、古典主義建築が「軽蔑すべき存在、無教養の具現」、そしていわゆる「詩趣」の欠如と同義であるなどとは主張してはいけません。

事実はという以下のとおりなのです。すなわち、カトリック教徒は十分な教育を受けてこなかったのです。目下、彼らは目覚めつつある状況にあるのです。そして彼らが最初に目にした美しいものがゴシック建築だったのです。それゆえ彼らはゴシック建築を採用し、恍惚状態に陥っているのです（このことは無理もないことです）。そして、ゴシック建築が彼らが知っている、あるいは聞いたことのある唯一のものであったことから、彼らはまるで趣味のようにそれに打ち込んでいるのです。徹底的にピュージン主義的な人物の言葉を耳にする時、私はその人が「外面的にめかし

込んだ」十分に教育を受けていない人間であることを確信します。ただしこの場合、あなた自身(ホームズさん)と、生来から熱中のな人物である親愛なるフィリップス氏は常に例外なのです。

このようなことを述べながらも、私はゴシック様式は全体としてギリシア様式よりも遥かに美しい建築的発明であることを確かに認め、いやむしろ断言さえします。

それはより一層良い結果を生み出す、活気に満ちた、適切な様式です。

しかし、建築よりも高尚なものが存在します。それは教会的典礼のことです。

ピュージン主義は、より高尚な事柄を冒瀆する一方で、建築を賛美しています。ピュージンは典礼規定をまったく無視しています。彼にとって典礼規定など存在しないのです。典礼に厳肅に臨む会衆は、ピュージンの目にはローマによってもたらされた障害物のひとつであるかのように映っています。私たちは嘗て、プロテスタント教徒が説教壇を教会堂の中央部に配置して、聖餐台を隠してしまったことをあざ笑ったものです。ピュージン主義はそれに似た受け入れることのできない考え方に再び戻ってしまいました。スクリーン(内陣正面仕切り)だけでなく、とりわけ高さの高い鷲の形状をした聖書朗読用の台がそうした結果を引き起こしています。先日、私はある教会堂の中にいました。そこでは大きな十字架が上に取り付けられた高さの高い鷲の形状をした聖書朗読用の台が防柵の内側、聖餐台の丁度前の部分に配置されていました。このような状態で誰が聖職者や聖餐式を見ることができのでしょうか。聖餐式を会衆に提示する以外に、高い位置に聖餐台を配置することに何の意味があるのでしょうか。私たちは聖餐式の公開という言葉に耳をします。しかしそれはピュージン式の教会建築においてはどのように執り行われるのでしょうか。

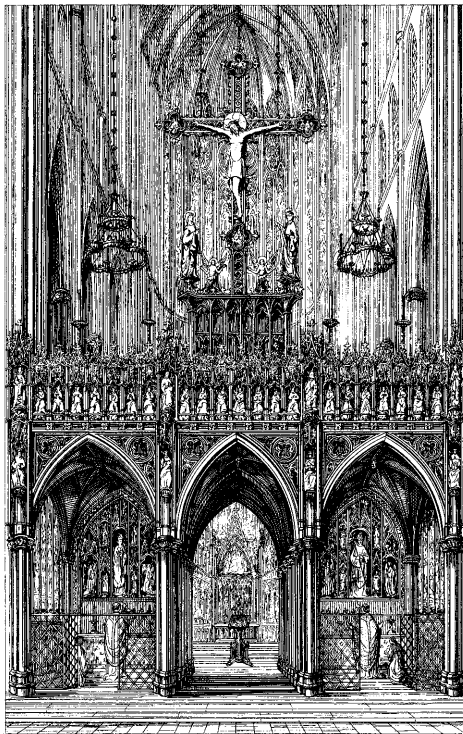
司教座は聖櫃の上に位置し、聖櫃の最上部は(聖餐台に向かって立つ)人の目の高さに位置しています。鷲を象った聖書朗読用の台、スクリーン、アーチ、そして身廊の分厚い控え壁を抜けて、聖体を提示したとして、その言葉が本来意味するとおりに聖体が人の目に見える可能性は低いのです。

今日、キリスト教会の典礼は変化を経ているのなら、教会建築も発展させようではありませんか。典礼の要求に適應するように教会建築を修正し、改良しましょう。ピュージン氏はこのことについて「否」と主張するのです。13世紀が14世紀へと移り変わっても、そして14世紀から15世紀へと時代が移り変わっても、建築は一貫して変化してはならない。嘗てのままでなければならない。信仰の精神は世の中に拡大を遂げるべきですが、外的、物質的存在としての教会建築は変化を遂げてはならない。私は聖餐式よりもトレサリーの縦仕切りを崇拜するであろう。このような考え方によって、建築運動は単なる古物趣味、あるいは信仰的な真剣さを持ち合わせてい

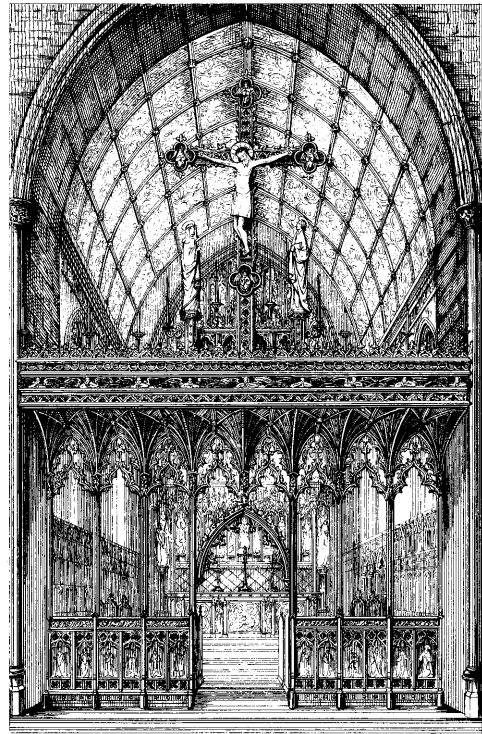
ないピュージ派の人々や詩人，空想家たちの道楽のような，実用性のない行為になっ
てしまっているのです。……⁽³⁹⁾

ニューマンのこの手紙は，教会建築をめぐるニューマンとピュージンの見解の相違を明らかにし
た。そしてその相違はとりわけ，聖餐式の挙行が教会堂内の会衆の目に見えるか，否かという礼拝
空間上の問題 本来，伝統的に身廊と内陣の間に介在する内陣正面仕切りの是非をめぐる議論を
含む に顕著に現われることになった。

ピュージンは，聖性の空間と会衆の空間とを区別する境界としての内陣正面仕切りの存在を，「一
般的に人々が認めたがる以上に，もっと重要」⁽⁴⁰⁾ な中世イングランドのキリスト教信仰と深く結び
付いた教会建築の構成要素として捉えていた。ピュージンが1851年に出版した『内陣正面仕切りと
十字架上のキリスト像を頂くロフトに関する試論』(*A Treatise on Chancel Screens and Rood
Lofts*, 1851) (図) の中で，彼は「それは建築的ディテールに関する単なる問題」ではなく，「戒律
と結びついた深遠な道義，そして信仰とさえ関わる存在」⁽⁴¹⁾ であると主張している。ピュージンは



A CATHEDRAL SCREEN.



A PAROCHIAL SCREEN.

LONDON: PUBLISHED BY J. BUNNEN, 41, NEW BOND ST.

(左) 大聖堂の内陣正面仕切り (右) 教区教会の内陣正面仕切り
(A・W・N・ピュージン『内陣正面仕切りと十字架上のキリスト像を頂くロフトに関する試論』から)

「信仰生活のかたちと信仰そのものとの間には、最も密接な関係が存在する」のであり、建築的・形態的伝統を尊重することがなくなれば、「神聖な聖体拝領の戒律における内的信仰を維持することはほとんど不可能である⁽⁴²⁾」と確信していた。聖性の空間と会衆の空間とを区別する境界として内陣正面仕切りを存続させることは、まさにピュージンの考える信仰の在り方と直接に結びついていた。彼は「この最も神聖なキリストの犠牲（もしくは犠牲としての聖体）が供えられる場が、教会のなかでもより神聖性の少ない部分から区別され、仕切られることは自然なことである⁽⁴³⁾」と考えた。ピュージンによれば、内陣正面仕切りを軽視する傾向は、「神聖、伝統、崇敬に関するあらゆる思い入れが、無知な革新と変化を好む姿勢とによって取って代わられてしまったかみえる⁽⁴⁴⁾」風潮と結びついていた。そして、こうしたピュージンの考え方からすれば、内陣正面仕切りを否定するニューマンらの見解は「神聖、伝統、崇敬に関するあらゆる思い入れ」を消滅させてしまう「無知な革新と変化を好む姿勢」の現われでしかなかった。

とりわけ、ピュージンの教会建築の内部に聖性の空間とその他の空間との明確な区別を追求する姿勢は、 sacramentの執行が会衆席から「見える」ことを重視したニューマンの姿勢と真っ向から対立した。内陣正面仕切りを不要な障害物とみなし、教会堂内の会衆全員が聖餐式を見ることができることを重視するニューマン的傾向を、ピュージンはローマのサン・ピエトロ大聖堂の実情までも引き合いに出して批判している。

……もし会衆全員が聖餐式が執り行われているところを見ることができるといことが必要不可欠なことであるとすれば、床面が平らな部屋でさえもその目的に適しているとは言えない。床は、部屋の後部に位置する観衆を高い位置に配置するために円形闘技場のように建てられなければならない。なぜなら、部屋の後部に位置する人々をそのように高いところに配置しない限り、会衆そのものがあらゆるスクリーン状の建造物（内陣正面仕切り）よりも一層巨大な障害となるからである。そしてサン・ピエトロ大聖堂そのものにおいても、教皇が宗教的儀式を執り行うとき、スイス人の兵士たちと高貴な近衛隊、あるいはお金を払ったか儀式に関心を持ち、高く建ち上がったロジアに着席している幸運な限られた人々の存在が生み出す人間のスクリーン・仕切りによって、実際に何が執り行われているのが見えないように視界が遮られているのである。もし宗教的儀式というものが見世物として扱われるとしたならば、それらは大規模な観衆が良く聞くことができ、良く見ることができるようになることを念頭に発案された通常の劇場建築において執り行われるべきである。カトリックの教義と明白なキリスト教に対する不信心との間には明確な境界が存在するということが、これまで大変正確に指摘されてきた。そして私は、キリスト教的な伝統と象徴主義に基づいて建てられた教会と、平土間やボックス席、棧敷席の設けられたコベント・ガーデン

ン劇場の間には何の繋がりもない，ということを強く確信している。⁽⁴⁵⁾

このように礼拝が会衆の目に見えることを重視するのなら，いっそ礼拝そのものを劇場で執り行えば良い，と主張したピュージンであったが，1849年にオラトリオ会がロンドンにおいて内陣正面仕切りなどあろうはずもないコンサート・ルームを借りて仮の礼拝の場としたことを知るに至って，彼のニューマンを含むオラトリオ会への強い失望感はその頂点に達することになった。そして1847年5月，シュルーズベリー卿（John Talbot, 16th Earl of Shrewsbury, 1791-1852）に宛てた書簡の中で，ピュージンは次のように記したのだった。

殿下はオラトリオ会がラウザー・ルームを礼拝堂として使用し始めたことをお聞きになりましたでしょうか。もっとも卑しむべき酒色に耽る行為，仮面舞踏会のような虚構の行為などを行うための場所を礼拝堂として使用しているのです。ある晩には仮面舞踏会を開き，次の日には聖体降福式を行うという具合なのです。これは私にしてみれば実に馬鹿げたこととしか思えません。そして私はオラトリオ会に対する一切の期待を捨て去ることにしました。何ともひどい信仰心の墮落です。何故，礼拝の場が社会主義者の集会所よりも劣っているのでしょうか。 sacrament を執り行うには何とひどい場所でしょうか。私にはどうしてこんなことが許され得るのか想像することすらできません。……この出来事はこれまでに私たちに対して加えられた精神的な打撃の中で最大級のものです。これらオラトリオ会の面々以上に失望させられる人々はいません。想像してみてください。詩人のフェバーがラウザー・ルームを訪れるところを。オラトリオ会の人々はスクリーン（内陣正面仕切り）やその他の建築要素に対して声高に反対するでしょう。私は一貫して彼らが教会ではなく，単なる部屋を求めていると主張してきました。そして彼らはそうした単なる部屋を礼拝の場として獲得したのです。何とも悲しい時代です。こんな調子が今後も続くとすれば，世の中はどうなってしまうのか想像することもできません。⁽⁴⁶⁾

6. 結 び

ピュージンが当初，オックスフォード運動に対して懐いていた好意的な感情は，それが一貫してイングランド国教会内の信仰復興運動でありながら，カトリックの伝統や慣例を強調するその姿勢において，ピュージンのゴシック・リヴァイヴアルの前提であった「カトリック信仰の尊厳」を19世紀に復興しようとする試みと多分に協調していると見えたことに起因していた。しかし，両者の教会建築をめぐる立場の相違は，ニューマンのカトリック改宗以後に明らかになった。その直接的

な要因は、ニューマンが19世紀中葉当時のカトリック教会の有様を重視していたのに対して、ピュージンは一貫してイングランド国教会の誕生以前のイングランド固有のキリスト教信仰への回帰、ないしはその復興を理想としていた点に見出すことができる。こうした両者の立場上の相違は、いみじくもニューマン自身がピュージン批判を展開した前出の手紙のなかで言及した問題、すなわち時代を経て変容を遂げてきた典礼の今日的（19世紀的）要求に適応するように、教会建築を修正し、改良するべきか否か、という教会建築と典礼の関係をめぐる両者の見解、立場の違いに起因していた。つまり、ニューマンは時代を追って変容する典礼を前提として19世紀に相応しい教会建築の在り方を思考していたのに対して、ピュージンは確固たる不変の典礼を中世イングランドのキリスト教会に見出し、そうした教会への回帰を前提としながら厳粛なゴシック様式の復興を追求していたのである。

付記

本稿は、筆者が以前、日本建築学会関東支部研究報告会（2003年3月）において行った二題の発表をもとに、加筆、修正を加えて一編の論文としてまとめたものである。

註

- (1) 『ゴシック建築の作例集』(*Specimens of Gothic Architecture*, 2 vols., 1821-3), 『イングランドおよびフランスにおける中世建築のゴシック装飾』(*Gothic Ornaments from Ancient Buildings in England and France*, 1828-31) 他。
- (2) オーギュスト・シャルル・ピュージンの生立ちや経歴については、Benjamin Ferrey, *Recollections of A. N. Welby Pugin, and His Father, Augustus Pugin: With Notices of Their Works*, London: Edward Stanford, 1861 に詳しい。
- (3) クライスト・ホスピタル・スクールにピュージンが正式に入学した記録は存在しておらず、「この学校の規則が当時としては大変に進歩的なものであった」ことから、ピュージンが聴講のようなかたちでこの学校で学んだ可能性が示唆されている。Clive Wainwright, “‘Not a Style but a Principle:’ Pugin and His Influence,” *Pugin A Gothic Passion*, eds., Paul Atterbury and Clive Wainwright, Yale University Press, 1994, p. 2 を参照。
- (4) Ferrey, *Op. cit.*, p. 32.
- (5) Ferrey, *Op. cit.*, pp. 32-33.
- (6) Michael Trappes-Lomax, *Pugin: A Mediaeval Victorian*, London: Sheed and Ward, 1932, 1933, pp. 57-58.
- (7) *Ibid.*, p. 56.
- (8) Denis Gwynn, *Lord Shrewsbury, Pugin and the Catholic Revival*, London: Hollis and Carter, 1946, p. 18.
- (9) W・オズモンドに宛てた書簡。1834年1月30日付のものと考えられている。Margaret Belcher, ed., *The Collected Letters of A. W. N. Pugin*, Vol. 1, Oxford: Oxford University Press, 2001, p. 24.
- (10) エドワード・R・デ・ザーゴ『機能主義理論の系譜』（山本学治，稲葉武司訳，鹿島出版会，1972年）122頁から引用。
- (11) J・R・プロクサムに宛てた1840年12月6日付の書簡。Cf. Belcher, *Op. cit.*, p.170.

- (12) A. W. N. Pugin, *The True Principles of Pointed or Christian Architecture*, London: John Weale, 1841, p. 67.
- (13) 八代崇 『新・カンタベリー物語 アングリカン・コミュニオン小史 』(聖公会出版, 1987年) 156頁。
- (14) Roderick O'Donnell, "Pugin as a Church Architect," *Pugin: A Gothic Passion*, eds., Paul Atterbury and Clive Wainwright, New Haven: Yale University Press, 1994, p. 63.
- (15) S. L. Ollard, *A Short History of the Oxford Movement*, London: A. R. Mowbray, 1932, pp. 159-160.
- (16) J・R・ブロクサムに宛てた1840年12月6日付の書簡。Belcher, *Op. cit.*, p.171.
- (17) J・R・ブロクサムに宛てた1840年12月6日付の書簡。*Ibid.*
- (18) A. W. N. Pugin, *The Present State of Ecclesiastical Architecture in England*, London: Charles Dolman, 1843, 1969, p. 42.
- (19) *The British Critic, and Quarterly Theological Review*, Vol. XXVIII, 1840, p. 515.
- (20) *Ibid.*, p. 516.
- (21) *Ibid.*, pp. 516-517.
- (22) *Ibid.*, p. 517.
- (23) *Ibid.*, p. 518.
- (24) J・R・ブロクサムに宛てた1841年1月22日付の書簡。Belcher, *Op. cit.*, p. 195.
- (25) J・H・ニューマンがT・モズリに宛てた1841年3月7日付の書簡。Gerard Tracey, ed., *The Letters and Diaries of John Henry Newman*, Vol. VIII, Oxford: Clarendon Press, 1999, p. 57.
- (26) *Ibid.*
- (27) シュルーズベリー卿に宛てた1841年3月17日付の書簡。Belcher, *Op. cit.*, p. 220.
- (28) J・H・ニューマンがJ・R・ブロクサムに宛てた1841年2月23日付の書簡。Tracey, *Op. cit.*, p. 43.
- (29) J・R・ブロクサムに宛てた1841年3月2日付の書簡のなかでニューマンは、イングランド国教会とカトリック教会との再統合の可能性を積極的に主張するA・L・フィリップスの見解には同意出来ないことを明らかにしている。Cf. *Ibid.*, p. 48.
- (30) J・H・ニューマンがT・モズリに宛てた1841年3月7日付の書簡。*Ibid.*, p. 58.
- (31) A・L・フィリップスに宛てた1841年4月13日付の書簡。Belcher, *Op. cit.*, p. 231.
- (32) J・R・ブロクサムに宛てた1841年3月28日付の書簡。*Ibid.*, p. 222.
- (33) A・L・フィリップスに宛てた1841年4月13日付の書簡。*Ibid.*, p. 231.
- (34) ピュージンは、1842年2月の『ダブリン・リヴュー』(*Dublin Review*, No. XXIII)掲載の論文においてこの点を指摘している。Pugin, *Op. cit.*, 1843, 1969, p. 153.
- (35) オックスフォード運動からオラトリオ会に入会した人々には、ニューマン以外にウィリアム・ジョージ・ウォード(William George Ward, 1812-82),フレデリック・ウィリアム・フェーバー(Frederick William Faber, 1814-63)らがいる。
- (36) Trappes-Lomax, *Op. cit.*, p. 224.
- (37) J・H・ニューマンがH・ウィルパーフォースに宛てた1841年2月22日付の書簡を参照。Tracey, *Op. cit.*, p. 41.
- (38) Gwynn, *Op. cit.*, p. 122.
- (39) Charles Stephen Dessain, *The Letters and Diaries of John Henry Newman*, vol. XIII, London: Thomas Nelson and Sons, 1963, pp. 460-462.
- (40) A. Welby Pugin, *A Treatise on Chancel Screens and Rood Lofts, their Antiquity, Use, and Symbolic Signification*, London: Charles Dolman, 1851, p. 1.
- (41) *Ibid.*
- (42) *Ibid.*, p. 3.
- (43) *Ibid.*
- (44) *Ibid.*
- (45) *Ibid.*, p.8.

(46) Ferrey, *Op. cit.*, pp. 127-128.